

MOAB

MOABの力強いサウンドを体感せよ。既存のルールを書き換えるバンド。

重厚なリフと陰鬱な空気感を巡る旅へDoomがPunkとMetalの獺猛さと交差する世界、MOABの音世界に身を委ねてほしい。

イントロダクション

昨日、トリノの歴史的な広場のひとつであるピアッツァ・スタトゥートで、M.O.A.B.のボーカル兼ベーシスト、サヴェリオに会った。

M.O.A.B.は、スラッジ/ドゥーム/ハードコアを融合させた新鋭バンドで、トリノのシーンに強いインパクトを与えようとしている。

サヴェリオは、トリノのパンク/ハードコア・シーンにおける歴史的な存在だ。

しかし少し立ち止まってみよう。「彼らは誰なのか？トリノとはどこか？イタリアとパンクにはどんな関係があるのか？」と疑問に思う人もいるかもしれない。



Piazza Statutoにあるアベリクス、地獄の入り口と言われている場所

1980年代、イタリアには非常に活発で生産的なハードコア・パンク・シーンが存在し、海外でも知られていた。

当時、世界的に最も重要なパンク系出版物のひとつがアメリカのMaximum Rock'n'Rollというファンジンで、いわばパンクの世界百科事典のような存在だった。数年間にわたり、この雑誌はイタリアン・ハードコアに特化したセクションを設けていた。

つまり、イタリアはメロディックな音楽やロマンチックなステレオタイプだけで語れる国ではないということだ。多くの若者がモヒカンや鉄付きジャケットを身にまとい、過激な音楽を暴力ではなく創造的エネルギーと自己表現として生きてきた。

この伝統は途切れることなく、現在も進化を続け、新たなバンドや新たなサウンドを生み出している。

イタリア・シーンのルーツを理解するには、Negazione、Nerorgasmo、Cheetah Chrome Motherfuckers、Indigesti、Peggio Punx、Bulldozer、Death SS、Jester Beast、Paul Chainといった歴史的バンドを聴く価値がある。

1990年代には新たな波が生まれ、Woptime、Church of Violence、Paul Chainなど多くのバンドが登場し、イタリア独自のスタイルを形成していった。



トリノにあるFiat自動車工場

サヴェリオ・スガラメッラとは

サヴェリオ・スガラメッラはトリノ生まれ。決して平穏とは言えない都市・社会環境で育った。

トリノはイタリア北西部に位置し、長年にわたり国内最大の自動車産業FIATの本拠地だった。このため特に南イタリアから多くの労働者が流入し、都市の社会構造は大きく変化した。

その結果、複雑な社会的・文化的緊張が生まれた。

さらに寒く湿った気候、長く灰色の冬、強い工業色の景観が重なり、不安、怒り、疎外感が育まれる環境となった。サヴェリオはその現実の中で育つ。彼にとって音楽は救済の手段であり、日常の灰色から抜け出し、自らの人生に別の意味を与える方法だった。だからこそ私は彼を深く尊敬している。

スケートボード、パンク、DIY精神

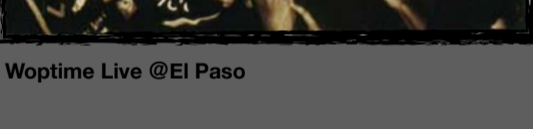
サヴェリオが10代だった頃、主にアメリカの影響を受けたスケートカルチャーがイタリアに広まり始めた。彼はイタリア初期のプロスケーターのひとりとなる。

1980〜90年代、スケートボードとパンク/ハードコアは密接につながっていた。ビデオ、ファンジン、そしてDIY (Do It Yourself) の精神は、音楽や思想、価値観を広めるための重要なツールだった。サヴェリオはそのすべてを体験し、シーンの一員となった。

彼の音楽的歩みは、トリノ初のアナーコパンク占拠スペースEl Pasoの誕生によってさらに強化される。ヨーロッパでは、占拠スペースとは自主運営の空間であり、ライブ、集会、文化活動が行われる場所である。El Pasoは瞬く間にトリノ・ハードコア・シーンの心臓部となった。



El Pasoと言う街の最も古いスクアット



Woptime Live @El Paso



Saverio 80年代後半

初期バンドからM.O.A.B.へ

サヴェリオの最初期の音楽経験は、NegazioneやJester Beastといった伝説的バンドと関わる中で築かれた。

私が彼に出会ったのは1990年代後半、彼がWoptimeを結成した頃だ。速くストレートなハードコア・バンドで、「Inferno sulla Terra」「Il Giorno del Giudizio」を発表。これらは現在、90年代イタリアン・ハードコアの重要作とされている。

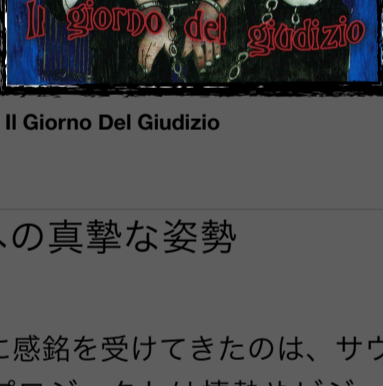
最終作「Mi Vida Loca」でその活動は幕を閉じた。

その後、ハードコアとメタルを融合したConcrete Blockを結成。サウンドは速く、重く、妥協がない。

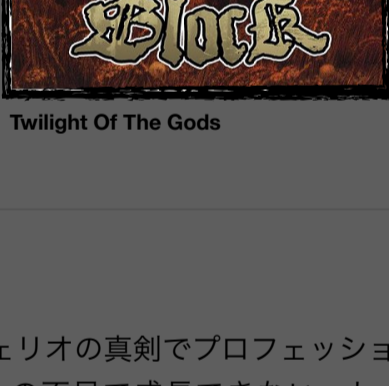
最新プロジェクトがM.O.A.B.だ。

ギター、ベース、ドラムのトリオ編成で、スラッジ、ストーナー、ハードコアのクロスオーバーを展開。最近、6曲入りデモ「The Sword」を発表した。

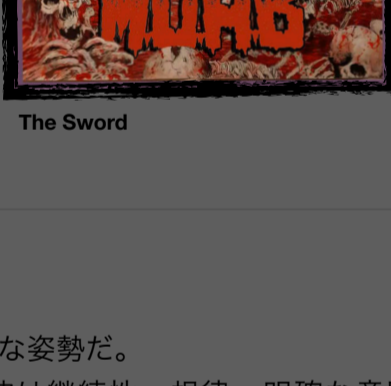
デモはSpotifyやBandcampなど主要プラットフォームで聴くことができる。



Il Giorno Del Giudizio



Twilight Of The Gods



The Sword

音楽への真摯な姿勢

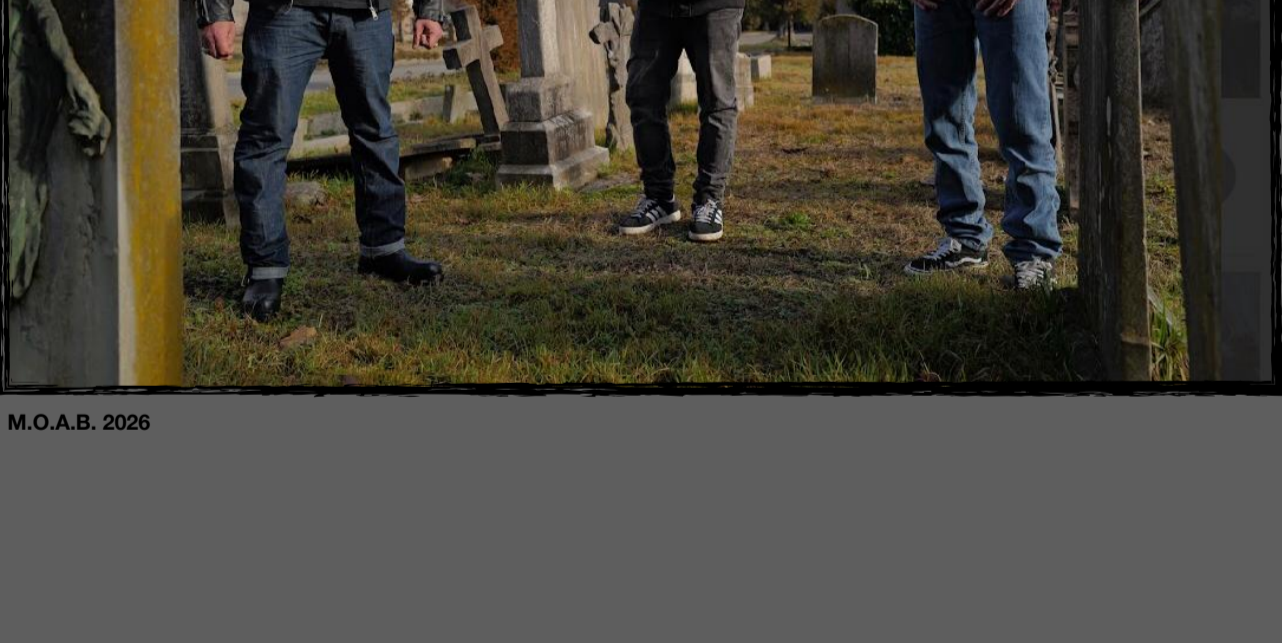
私が常に感銘を受けてきたのは、サヴェリオの真剣でプロフェッショナルな姿勢だ。

多くのプロジェクトは情熱やビジョンの不足で成長できない。しかし彼は継続性、規律、明確な意図を持って取り組んでいる。

それはM.O.A.B.の楽曲を聴けばすぐに伝わる。

日本ツアーのアイデアを提案したとき、彼は即座に関心を示し、真剣に受け止めてくれた。

それでは、彼の言葉を紹介しよう。



M.O.A.B. 2026

インタビュー

インタビュー導入

サヴェリオ、このプロジェクトに参加してくれてありがとう。日本とイタリアのシーンを近づけることを目的としている。

将来的には日本のバンドをイタリアで紹介する逆の流れも実現できればと願っている。

Q. どこで生まれ、どのようにパンクやメタルに出会いましたか？

A. トリノ生まれで、南イタリア出身の移民家庭で育ちました。パンクとメタルに出会ったのは80年代初頭、13歳頃。テレビでは「The Warriors」やアニメ「Heavy Metal」が放送されていました。当時の影響はVenom、Celtic Frost、Black Flag、Metallica、Slayer、Black Sabbath、Negative Approach、Misfits、Necrosなどです。

Q. これらのジャンルはあなたにとって何を意味しますか？

A. まず自己決定、表現の自由、行動の自由です。妥協せず自分自身でいるための手段でした。

Q. プロスケーターとしての経験と、スケートとパンクの関係について教えてください。

A. ほぼ偶然に始まりました。スケート・パンクの環境にいて、上達し、やがてフォトグラファーやスポンサーが現れました。当時は主にアメリカのハードコア・パンクやスラッシュメタルを聴いていました。スポンサーはGraw Skateboardsのオーナーでした。彼の家で、Jimi Hendrix、Black Sabbath、The Doorsを聴きながら、手作業でボードを作っていました。

Q. 最初のバンドFuori Controlloから現在までについて教えてください。

A. ベースは本能的に弾いていました。1995年にFuori Controlloに加入し、1997年に脱退。音源は残していません。1999年にPaoloとWoptimeを結成し、2005年まで活動。4枚のアルバムを発表しました。2006年にConcrete Blockを結成し、2014年まで活動しました。

Q. M.O.A.B.を結成した動機は？

A. 内側から湧き上がる必要性です。自分自身への誓い、ほとんど精神的な使命のようなものです。

Q. このプロジェクトに何を期待していますか？

A. 観客がライブを楽しんでくれること。強い記憶を残せる存在でありたい。

Q. 日本のシーンについてどう感じていますか？

A. 日本人は真面目で礼儀正しく、細部まで妥協しない印象があります。古い歴史を持ち、過去を大切にしている。Sabbat、Church of Misery、Loudnessのようなミュージシャンや、素晴らしいチョッパービルダーを思い浮かべます。個人的に日本から生まれるものはすべて大好きです。

結論
改めて感謝します
現在、日本ツアーの実現に向けて動いています。
二つのシーンと文化を結び架け橋になることを願っています。
音楽を通じて新たなつながり、文化的な活性、そして新しいインスピレーションを生み出すことが目標です。